
死んだ数だけ強くなる？

コマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んだ数だけ強くなる？

【Zコード】

Z7396K

【作者名】

コマ

【あらすじ】

五十嵐涼太は、新高校一年生になる……はずだった。しかし突然変な世界に連れて行かれ、変な神様に出会い、しかも手違いで殺されたときだ。そしてそのまま死ぬか、異世界に行くかと問われ、死にたくないから異世界へ。その時に変な能力を貰うも、その全貌が思い出せぬままに、涼太は異世界での「ごたごたに巻き込まれていく。

1：死……な無い！？

春の温かい陽気。

気持ちの良い春風。それを受けながら、俺は新高校一年生として最初の登校を徒步でしている。

あちこちでは桜がそろそろ咲くところ。その日が待ち遠しい。

俺は新しいクラスはどんなだとか、担任はどうなつただとか、まあそういう普通のことを考えながら、ゆっくりと歩いている。

が、変化は起こつた。

世界が真つ暗になつた。

哀れな少年よ

声が聞こえた気がした。

相変わらず世界は真つ暗だ、しかし俺には意識がある。だが感覚はない。

これが死後の世界……いや待て、俺死んだっけ？

少年は死んだ

あ、そなんだ……

というか、この声の主は誰だ？

私は神だ

あ、そうですか……

疑わないのか？

いや、むしろこの状況であなたが普通の人間だって言われた方が困る。

冷静だな……

よく言われる。

取り乱してる自分がて、なんかかっこ悪く見えてそれで嫌なんだよな。

ちなみに、少年を殺したのは、私だ

ちょっと待てえ！

……いやいや待て！

立派に取り乱したな

当たり前だ！ いきなり神様の声が聞こえると思つたら、私があなたを殺しました！？

そんなの受け入れられる許容量じゃねえよー……

……てか、え？ やっぱり俺死んでるの？

手違いがあった。申し訳ないと思つていい

いや、まあ。許すとか許さないの次元を越えすぎてるんだがどうりあえず俺は死なるの？

そこで選択肢がお前には2つある。本来なら、このままの世行きなのだが、それではあまりにも哀れ。というわけで、少年には別の世界にて第2の人生を歩む権利を~~与~~える

うーん、別世界か。

とりあえず死なないですむんだよな？

そうだ。だがその世界というのはだな……今も戦争の真っ只中だ

マジで！？ じゃあ俺なんかが送り込まれても、すぐに死んじゃうんじゃ……

だろうな

おいい！ 神様無責任！

だが戦火の及ばない場所に逃げ、安穏と暮らすといふこともできる

その前に死ぬだろうが！

せつかく生き返つて、またすぐに即死濃厚の世界に送り込まれるなら、このまま死んだ方が良くないか？

だが少年を死なすのは忍びない

じゃあどうすつやいいんだ！

少年に、力を~~与~~えよう。死んでしまわぬよつ

……意識が遠くなつて……

「……リリが異世界か」

あたり一面、真っ白だ。
まさか異世界というのは、こんなに何もない場所だとは思ひも
なかつたな。

「いや、違うナビ」

「うおおこー、誰だよー」

「え？ 神様」

田の前に立るのと、ちょっとイケメンな俺より年上か同じ年くら
いにしか見えない若い男だ。

服装は、もうふざけているとしか思えない。

あと背中には、七色に光っている半透明の羽が生えている。ふざ
けているだ。

「神様といふのは、田に鬱をもつて生やしてゐるんじゃないのか

？」

「それは違う。せつかく好きな年の姿でいらっしゃるのと、わざわざ
老体を選ぶ神は見たことないからなあ」

「随分と、ふざけてるな」

「ははっ、恐れ多いな。殺つちやうつよ?」

田がマジだったから血重める」とこいつ。

「うひと待てよ! あんた俺を殺したとかなんとか、つかさつ
きとキャラリ変わりすぎだろ!」

「まあ待てクソガキ。説明すっから。まずこには、俺の世界だ。
神つてのは、それぞれに個人的な聖域を持つてるんだ、こんな場所
に踏み込む下等生物は稀だから、誇つていいぜ」

「いちこち言葉の端がつやべりしょりがない」

「ありがとな。そんでまあ、俺が確かにお前を殺しちゃった。聖
域に溜まっていた邪念諸々をテキトーに外界にほつたら、偶然お前
に当たつたんだ」

「いや褒めてないしもつ説明も意味不明なんだけど、とつあえず
俺はなぜここに?」

「……あつたくゆとつは……それも説明しなきゃならんのか

「うるせえ、早く説明しやい」

「後で絶対お前泣かすからな? まあ説明してやるわ。つまり、
神様がすばらしい力を『えてやろ!』って言つてんだ、発狂するほど
喜びやがれ」

「ああ、そうか。それは助かるな」

どんな力なんだろ？

死なないようになんてんだから、もつものすこしく強くなつたりとか
だろ？

神様は、俺の頭に手をのせた。

ちょっとイケメンな神様の顔が、一気に真剣になる。

「悪いが、不老不死は下等生物には過ぎた力でな……まあそれに
近いものをくれてやる」

一瞬、俺の体が輝いた。
だがすぐに光は消えた。

「え、終わり？」

「ああ、終わりだ。とりあえずどうなつたか教えてやる？」

神様はどこからか巨大な剣を取り出していた。うーん嫌な予感が
する。

「死ねえっ！」

「ぎゃあああああ！」

俺の右肩から巨大な刃が突き刺さり、どんどん深く食い込んでい
き、ぱつさりと袈裟斬りにされた。俺の体は斜めに斬り裂かれ、崩
れ落ちていく。

「いいいいいいだああああああー いてえよー！」

「ふふふ、すごいだろ」

「すげえ痛いだけだ！」

「バカが、痛いで済んでいることに違和感を感じる」

「そ、そういうば……って、え？ 体が……」

一度は完全に切り離されたはずの体が、またくつついでしまった。服は完全に切れてしまつて、白いシャツとか血まみれなんだけど、なぜか生きてる。

つかこの出血量やばいな。

「まさか不死……」

「クソガキ。不死ではないと言つただひつ」

「いや、だつてこれは」

「あと100回斬ればお前は死ぬ」

「は？」

「お前は1日に100回までなら死んでも死なん。体は元に戻る。
まあ101回目は死ぬけどな」

「マジかよ……クソ痛いんだがどうにかならないか？」

さつきは本気で死ぬほど激痛が走った。

死なないのは結構なんだけど、さすがにあんな目にあつてまで生き続けるというのは、場合によつては苦痛かもしれない。

「バカめ、本来ならもつと痛いはずだ。お前のよつな軟弱なものでも、心が壊れぬよつ痛みは感じにくくなつておるのだ」

「ええー、もつとも……これでも激痛なんだけど」

「まあ、ギリギリで心が壊れない加減してゐるからな」

「鬼つー。」

「黙れクソガキ、俺は神だ」

「どんどん」こいつのキャラが変化していく。
「どうか、本性が現れているのか。なんなんだこのドリの神様。」

「じゃあなクソガキ……ふむ、一応名前を訊いておへか」

「五十嵐涼太だ」

「ふむ。まあ、あと5分もすれば忘れるがな」

「なぜ訊いた！？」

「一応だと訊いたはずだが？ 送り出す時に、名を呼んでほしい
ものだらう」

「いや、別に？ とか言つてはいけないよね。」

やつぱり神様なりの気遣いとかだつたり、やつぱり俺のことを手
違いで殺してしまつたことに罪悪感とか感じてゐるのだらう。

「とりあえず、そろそろ時間だ。『ミリ』をいつまでも俺の個人聖域に置いておくのは不快だからな。まあ出発の前に注意しておこう」

「いろいろ納得行かないが、聞こう」

「お前は、24時間という一日の単位の中で、100回までは死ねる。つまり101回目は死ぬから『氣』をつける」

「はいはい」

「そして、100回がリセットされるのは24時を過ぎた時だ。後は、死ねば体は再生するが、死なない限り再生しない」

「……？ つまりビリビリこうことだ？」

「骨折くらいいじや死なないから、再生しない。たとえ腕の骨が粉々になつてもな」

「なにつー？」

「まあ死ねば完全に回復するから『氣』にするな

「氣にするわー！」

「ふつ……まあ、がんばってくれ」

神様は俺に近づいてきた。

そして手を俺の頭にのせた。多分この世界から、俺が行くことになる異世界とやらに送るのだろう。

「ちなみに、ここでの記憶はほとんど消える」

「……注意の意味無かつたじゃねえか！」

「まあそりだな。だがもう時間だ。行つて来い……ダイスケよ」

「かすりもしねえよ……この鳥頭……」

体が光に包まれ、徐々に視界が無くなつていぐ。

次に感覚が消えていく。そして意識もはつきりしなくなつていき、俺は眠りに落ちるように意識をなくした。

ちくしょう神め、バカにしやがつて……くたばりやがれ。

「うああああああ！ つて夢か！？ といつかなんの夢見てたんだ？」

「ここなんだここは。
なんだかうるさい。」

俺は汚い地面の上に寝転がっていた。なにやつてるんだ俺。

「確か俺は……学校に……」

しかし、ここはどう見ても通学路ではない。遠くの方には人がいるみたいだが、どうもそいつ等おかしい。

「どうやらうるさいのは、そいつ等が雑音を出していながらなのだが、どういうわけか見んな銃を構えているわけだ。

大人数でサバゲーでもやつてんのか？

しかしこの音、リアルだなあ。

ザクザク、と地面を踏みしめる音が聞こえた。俺に誰かが近づいてきたらしい。

「……えーっと。ijiはijiですか？」

とりあえず話しかける。

身長、2メートルはあるか、かなり大きい。それに顔が完全に隠れていって、腕はなんだか機械的で、サイコガソミタないのがくつついてる……

俺の第六感が、逃げろと叫ぶのだが……

ガチャリ、と、サイコガソが俺の額に突きつけられた。

そして直後に、額に熱いものを感じたが、すぐに俺の意識は落ちていってしまう。

……死んだな。

「殺す気かっ！」

ん、生きてるな。

いや、死んだ気がしたんだが、夢だったか。でもあたりはさつきと同じで荒れた土地だ。そして俺は地面に寝転がっている。だが何か、冷たい。

「なんだ……なんじゅうりゅああああー。」

「え、ええつ！？ あんた生きてんの！？」

「むつ、誰だか知らんが失礼だな」

高い、女の子の声だ。

「いやでも……その出血量普通に即死じゃないの」

「あ、ああ。俺もそいつ思つんだけど……」

服も、顔も、あと寝転がっていた地面も。血で染まっているのだ。

「え……？ あんた傷は？」

そう言われて額に触れる。うーん、傷ひとつ無いな。

「どうなつてんのよあんた！」

「俺が聞きたい。といつか、誰だあんた？」

「私？ 私はリサ。人部隊、第一特攻部隊長よ

「いや、そもそも当然のように語られても何がなんだがせつぱりなんだが」

第一特攻部隊長？

というか人部隊つてなにわ。

「といつかあんた戦場舐めてんの？ そんな軽装で、武器はあるんでしょ？」

「俺の国では武器は所持しちゃいけないんだよ」

「じゃあ丸腰なの！？ あんたバカじやないの？」

「失礼な、バカじやねえよ！」

「ああんもう！ あんたと言ひ合つてる暇は無いの！ とにかく死にたくないればその辺で小さくなつてなさいよ！」

……分けが分からんだけど。

俺がボーッとリサを眺めていると、その背後から迫つて来る変なゴツイ人影が見えた。

……俺の頭撃ちぬいた野郎じやないか！ やつぱり夢じやなかつたんだな！ いや、コレも含めて夢か！？ わけ分からんぜ！

「リサ後ろ！」

「え、あー、こいつー！」

リサは左太ももについてあるホルスターから、銃を抜き、すぐさま発砲した。

その銃も本物のようで、オレンジ色の閃光が光、そして硝煙が立ち昇る。

その動作は流れるようで、ものすごく速かった。

「ゴツイ人に、銃弾は直撃したようだったが、全く倒れる様子も無く、ゴツイ人はサイコガンをリサに向けた。

何か知らんが、やっぱそう……

立ち上がり、右の拳を握り締めて、ゴツイ人の顔を殴る。

「おらあつ！」

「あ、あんたなにやつてんの！？」

「ゴツイ野郎は……」ミコも動かなかつた。うう、へこむぜ。俺のパンチ力酷いな。

サイコガンの照準は、リサから俺に移り、そしてサイコガンの銃口が光つた。

一瞬、頭に熱いものを感じたが、あつといつ間に俺の意識は落ちていく。

……死んだか

ねえ！ ねえってば！

意識が回復する。

やつぱり、死んでないのか。一体全体どうなつていいんだ。これはずつぱり夢か。

「起きろつて、言つてんでしょうが！」

「ぐはあつ！ 仮にも一度死んだ人間の鳩尾に肘打ちするな！」

「生きてるじゃないの！」

「絶対死んでるんだって！」

血の海が一つ増えてしまった。
やばいな。確かに人間は2リットルの血を失えば、まず死ぬんだよ
な……俺は、少なくとも4・5リットルの血は失っているだろ。う
いやいや、ちゃんと死んでるんだ。
そりやそうだ、あの出血量で死なないわけが無いからな……
なんで生き返るんだ？

少し離れた位置では、ゴツイ人……なんか人がどうかも怪しい何
かは地面に倒れてのびていた。

「あれ、死んだのか？」

「死ぬというか、壊れたわね」

「……つまり死んだ？」

「……あれば機械よ？ とかあんたほんとに何者？ この戦
場に軽装に丸腰でやつてくるし」

「き、機械？ あれが？ 技術も進歩したもんだなあ

「あんなのかなり古いモデルよ？」

「は、はあ……もうわけ分からない。」

「戦場よ、機械軍と人部隊の戦うね」

「機械軍？ なんだそれ、 そんなのまるで異世界の……」

「……何か、 思い出しそうだ。」

「俺はここが異世界だと知っているんだ、 なぜ？ それは分からない。」

「ただもう一つ思い出した。 俺は、 不死、 ではない。 ただ不死に限りなく近いんだ、 誰かに聞いた。 誰だっけ？」

「分かる事は、 ここは戦争の真っ只中である異世界で、 俺は不死に近い存在ということ。」

「……敵が退いていくわね……」

「遠くの方では、 何かが遠ざかっていくのが見える。」

「とりあえず、 あんたにはいろいろ聞きたい」ともあるし、 その様子じや行く当ても無いんでしょ？」

「あ、 よく分かったな」

「……ここに捨てとこうか？」

「「めんなさこ」めんなさいー。 もうパニッシュが許容量とつくに超えちゃってやばいから助けてください」

「はあ……全く、 なんのよあんた」

リサは盛大なため息をつくと、 歩き始めた。

現状、 俺にはリサしか頼りが無いので、 その後ろについて俺も歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7396k/>

死んだ数だけ強くなる？

2010年10月11日19時50分発行